

平成 22 年度 海域の物質循環健全化計画気仙沼湾地域検討委員会（第 2 回）
第 1 回検討委員会指摘事項に対する対応内容

委員名	指摘事項	対応内容
(1) 海域の物質循環健全化計画検討方針について 及び (2) 地域検討委員会の進め方について		
高崎委員	既往の調査について精度が均一でない場合もあるから云々であるが、判断が非常に難しい。調査手法が変わったからデータを使う、使わないだとか、異常値だからはずすといった取扱いは非常に慎重な検討が必要である。一見、異常値と思われる値が非常に重要な意味を持つこともある。さらに、モデルに使用する際には、データの代表性についても考慮する必要がある。	今後、業務全体を通して、データの取り扱いには十分注意していきます。
(3) 平成 22 年度現地調査について		
石川委員	今回の調査は空間分解能としては 5 地点と少ないが、これまで行われているものより项目的には増えていると思う。項目と空間の分解能の両方を考慮する必要がある。なるべく早く整理をして、全体としてどのような考察ができそうかというイメージを提示してほしい。	今後、業務全体を通して検討を行います。
寺崎委員	大船渡湾及び大槌湾での経験から、カキ、ホタテ、ワカメ等の養殖物の現存量をしっかりと把握して、どの時期にどれくらいの濾水量が必要かなどという検討をしないといけない。	今後、業務全体を通して検討を行います。
石川委員	統括委員会でつくられるモデルは流動のモデルがどのくらいちゃんとできているかが結果を大きく左右する。今回は 9 月の調査を行い次は冬であるが、季節的な変化をどのくらい表現できるかをどこかの段階でチェックする必要がある。今回の調査は時間が限定されているので、もう少し時間的に計測したデータで補足する必要がある。	今後、既存資料等を含めて検討を行います。
寺崎委員	三陸で一番生産性が高いのが春先である。今回の場合、調査ではこの春が対象となっていないので、物理生態系モデルをつくる際に不足となる恐れがある。その辺は、既存資料により検討する必要がある。	今後、既存資料等を含めて検討を行います。
(4) 地域の物質循環に係る情報整理について		
小野寺委員	資料の中で、下水道普及率が 75% を超えていると書いてあるが、これは湾奥部の状況である。湾中央から湾口にかけては下水道区域ではなく、それほどの普及率ではないので改めて調査をお願いしたい。また、供用開始以来、年に 6 回ほど海域の調査を行っているので参考にしてほしい。	気仙沼市へのヒアリングを実施しました(11/1)。ここで、下水道普及率と海域の調査の結果を入手した。これらは、今後の検討に利用します。
石川委員	気仙沼湾では、過去に養殖の場所を変えたとか、大規模浚渫を 10 年がかりくらいで行ったなど、大きな変化があった。物質収支モデルが現在を説明するのに加えて将来的な対策の効果検討に使用することを考えると、過去の大きなインパクトの変化をも説明できるということが重要と思う。そのため、当面の計算対象年次は 2008 年でもよいが、過去の状況についても検討する準備をしたほうがよいのではないかと。	当面は、2008 年を対象年次として季節変動等の再現を念頭におきながらの対応になるかと思いますが、統括委員会と相談しながら検討していきます。
石川委員	資料によると、2006 年、多分親潮の第一分枝が進入したときに水質が大きく変化し、貧酸素が広域化した。これは、鉛直循環が一時的に大きく強められたということであるが、物質収支モデルとして、最初は 2008 年で検討したとしても、時々生じるそのような現象も考慮することが重要である。	